



## 漫録



# 三陸津浪の跡を訪ねて

谷 口 松 雄

三月三日午前二時半に起つた外側地震帶の地帶のため、三陸を襲つた津浪の慘害を調べに出かけたのは、未だ、被害の實情が、新聞號外や、ラヂオで詳細の報道を出す邊の

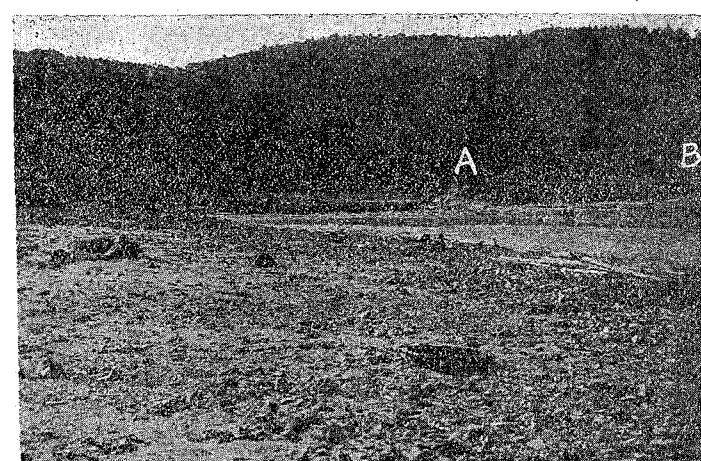
無い三月三日の夜、即ち津浪の襲來した當日の夜だつた。

上野驛を午後十時半に出發する常磐線廻りの急行列車にはもう貴衆兩院議員の慰問班や、東京新聞の特派員、東京府、市の救護班が乗り込んでゐた。被害の程度が、未だ判明してゐないので、一抹の不安が車室内に漂つて一種の陰慘な氣持で眠りに就くことも出來なかつた。

四日早朝宮城縣廳を訪ねて、被害の甚だしいのは大體に於て牡鹿半島以北であるとのことを聞き、直に仙臺を出發して縣土木課の大槻技師を煩はして石の巻より被害地調査の第一歩を牡鹿郡大原村大谷川に入れる。途中萬石浦から牡鹿半島に入つて大六天山の裾から中腹へそして鞍部を超えて海岸に出る府縣道のカーブと勾配の急なのに久しうりに此うした所に來た私の膽は相當に冷やされたが、先を急ぐ私達の自動車は途中でもう救護品の配給の任に就いて居る縣土木課の砂利運搬トラックや、東北帝大醫科の救護班

などと、前後したり出合つたりしながらひた走りに走つて大濱村の大谷川に到着する。

被害の慘状や、津浪の原因等學說、實際等に就ては其の後各新聞や、斯道の權威者等によつてラヂオ其の他により一般に報道せられてゐるし、門外漢の私には、其れ等の事態に就ては述べる資格もないから差控えるが、津浪の被害の現状をはじめて見る私は、第一歩の大原村大谷川から鮫浦、谷川と巡つて日々驚くの外は無かつた。



(1) 大谷川村原に於ける堤防の潰れ(方遠A BA) これが堤防の一部で、基部は手前の方で流れ込まれて押し倒された。

に、壊れた家具の端切れや、古板、古箱等で間に合した俄造りの棺桶が大小十四五個地面にそのまま並べられて、それでもこればかりは新しい木で造られた小さい白木の位碑を置いて細々と線香の煙を立て部落の憔悴しきつた人達が黙々として取りまいてゐるのに遭つた時、憮然たらざるを得なかつた。區長さんに會つてお見舞を述べて津浪の様子を尋ねたが、何しろ此の所で、長居はお氣の毒と早々引上げる。谷川でもこれは又一掃き掃いた様な家屋の押し流された所を見て、津浪の力の無限に強いのに驚く。海岸堤防の破壊された跡を見たがよくも

此う壊れるものだと思つた。一様に押し流し、押し倒して引き渡つて行つてゐる、家も立木も電柱も、堤防も橋もあつたものではない。何處もかしこも皆一色に灰黒色に塗りつぶした泥まじりの浪が襲撃してゐる。

一體津浪の力が、何んな風に働くのか技術的に見れば、良い研究材料になるものだらうが、津浪の衝撃に對する防護設備が、家屋に橋梁に、海岸の護岸や堤防に取り入れ者慮せられてゐるのだらうか？ 海波の衝撃に就ては検波の裝置などで前々から考えられてゐる由を聞いてゐるんだが、普通の波とは異つた形態でヒタ押しに押して来る津浪に就ては、普通の荒海での「波浪」と同じ様



(1) 記者は邊の此跡たつあの屋家の落部川谷村原大 (2)

の臺土は形跡がたみでん竪が屋家く近岸海てれま園に防堤

(いなゐてつ残かし分部なら平のきよた、かトーリクンコ

れるだらうけれども、今までこの點を考へてゐなかつたたために、あんなにひどくやられたのぢやないかと思ふ。特に、三陸地方の如きは今まで記録に残つてゐる津浪だけでも數回大きなものに襲はれ、しかも明治二十九年の最近のものに至つては三十八年前の生々しい出来事であり、記録の年

數を見ると漸次週期が短くなつて、六十年五十年四十年

とだん／＼縮つてゐる、この割合が、正しく守られたならばこの次の津浪は三十年後の昭和三十八年に来る計算(?)になる。起らざる事を望むが、あり得べからずと斷言出来ない以上、防備は今回の慘害を最後として厳重に固めらるべきであらう。

津浪の力の猛烈さは、見た人でなければ一寸解り兼ねるであらう程意外である。自通り直徑七八寸の小電柱など地表上一二尺の所でキレイに横断されて、切り口の木目の

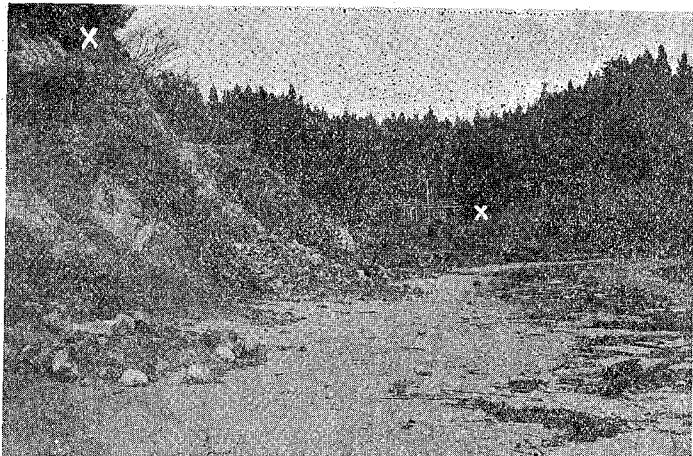
凸凹が二三寸を超えない、まつなくブツツリと切られてゐる。家屋の木組みなどは柄の所からブツツリ切り取られて、ただ屋根の合掌部だけが、或ひは二階の部だけが、言ひ換えれば津浪の高さよりも上だつた部分が、まづ原形を留めてゐる外は、板圍ひであらうが、壁であらうが、柱であらうが、みな一樣にスツパリとひた押しに押し流されてゐる、柔道の足拂ひが、キレイにきまつた形である。家の中にあらる家財道具だつてこれ又一樣に強い力で押し潰されて、外框はもとより抽出までベラ／＼になつてゐるのさえある。

そしてそれ等の物が、津浪に押されて、津浪の届く所まで陸地の奥へ、浪頭に乗つて打ち上げられてゐる。津浪が何處まで來たかは、それ等のコマノヽした物が打ち上げられた線を辿つて一目瞭然である。それ等の物が、打ち上げられた様子を手近な物で言ひ表さうなら、マツチの軸を水を入れたバケツにドツサリ入れて、かきまわして置いて平地へブチまけた所を見るのと同じ恰好である。

一方浪頭に乗れないで、捲き込まれた物は津浪の引きに包まれて海の中へ持ち去られ、それが、第一回、第三回の津浪に揉まれ／＼て或ひは海岸に、或ひは水中にクタ／＼になつてウツチャられてゐる。それが、たつた二三十時間前に起つた暴威などケロリと忘れたやうな静かな穏波にノタリノ／＼と揺られてゐる所へ、三陸一帯の生産物である鰯の目ざし（此の地方ではガーボシと言ふ由）の乾燥中のものがやられて浪打際に散らばつてゐるを啄みに來た無數の鳥の群れと、これは何を漁るのか、青森縣八戸沖の燕島に群棲するので有名な鷗の一種「うみねこ」が、そこら一帶

が白くなる程やつて來てあの一種名状し難い哀調を帶びた  
暗き聲を喧しく立てて浮んでゐる  
状景は、まことに荒涼たるもので  
ひしくと慘害の跡を一層悽惨に  
してゐる。

大原村の視察記事ばかりで大分  
足踏みをした、次へ移らう。大原  
村から引き返して又大六天山の中  
腹を縫つて萬石浦を半週して女川  
町に出る、こゝの港灣は水産會社  
の岸壁がガツチリしてゐるため附  
近一帯の家屋も岸壁のおかげで被  
害の程度が他に比較して輕少であ  
る、ドーンと來る津浪の迫力を一  
應も一應も此の岸壁で撥ね返して  
力を弱められたのである。それで



が浪津でま所の印×) さ高の浪津間浦駆、川谷村原大(3)

米六らか位潮中らたつ測で所の印×の前手るあが跡たつ上

(たつあ

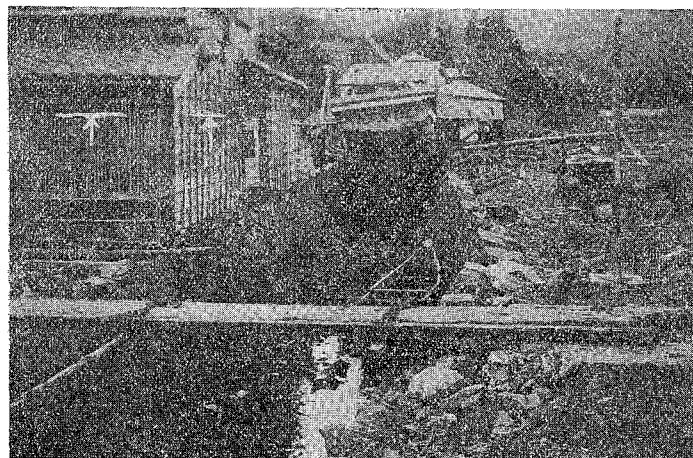
側はたゞ海に注ぐ水路に架した橋が、真直ぐに押し奇した  
津浪の力でケシ飛ばされてゐ  
るだけである。

それでも海岸通りの人家に  
は地上五六尺の所に水の來た  
跡が残りその高さまでの物に  
は大なり少なり損傷を受けて  
ゐる、此處で珍らしく思つた

のは幅二間の水路に、同じ幅  
の發動機船が、真直に押し込  
められてゐたことで、通過地  
であつたらうと思はれる溝の  
橋は跡だけ残してケシ飛んで  
ゐるのに、溝に接して建つて  
ゐる家には何の損傷も與へな  
いで其の奥へ入り込んでゐる

此の岸壁から突出した棧橋は無残に壊されてゐるが、陸地  
(寫真4参照)。此んなのを惡魔の悪戯とも言ふか。

女川から海岸續きの十五濱村へは直線とすれば三里程の所であるが、中途の道路も潰れたし未改修の關係もあつて車も通らず、止むなく遠く石の巻から飯野川まで迂回して追波川の改修堤防を下つて十里ばかりの迂回、しかも追波川から離れて十五濱村へ行く間には小淵山の鞍部を超える急峻な峠がある、フォード級の車なら本とうに喘ぎ／＼登る。山頂に近づくに従ひ折悪しく降り出した粉雪が直に積つて、ともすれば車が止る。十年ばかり前に改修したとの事だが、路幅、勾配、カーブとともに、もう一息の奮發して貰つたらと思ふ。まして今回のやうな災害があると、地方から片附けの應援に出た消防隊や、青



の浪津は印矢たし印に屋家) 船たつ嵌に溝ので町川女 (4)

(たつあが橋道縣に所るあの橋假の前手す示をさ高た來

するので、通路の具合が悪いのが切實に憾めしい。十五濱村の

雄勝に入つたらまた一層の溝目荒涼さである、一體に北に進むに従つて今度の被害は甚だしい

雄勝では行つた日即ち五日の午前にはもう電燈會社や、遞信

省の係員が電燈、電話の復舊に假建ての電柱に架線を張り始めて居り、救護班は部署に就き、役場ではもう救護品が積まれてあつた。

此處に限らないが、交通の便の良い所には救援の手が迅速に伸び、然らざる所は何日も空し

く待つてゐる外は無い、それがため助かるべき人命も可惜

衷ひ、負傷の手當も遅れて重態に陥る。

家財をスツカリ濡らされたため

に、着る物も無く、乾すべく冬の陽は弱く、まして津浪に引續いて雪や雨に襲はれでは如何とも詮方が無い、聞けば、寝込みを津浪に襲はれて寝巻のまゝ飛び出したまゝ立ち働いてゐるため風邪に冒され、肺炎を起して重態に陥つた者も少くないとか。立ち残つた樹木に竿を渡して、濡れ汚れた彼氏、彼女達の晴れ着等を弱い陽に乾してゐるのを見ては洵に同情に堪えなかつた。



木軸のチツマの例帶一邊のこ) 跡落部の勝雄村濱五十。(5)

(るるてし亂散が物の々種にうやたい撒ラバを

が來ると、直に警報を部落中に發して、避難させたため、人命には被害が無かつた由。

古老の経験によつて大谷一部落の人命は完全に救助された。何と貴い経験では無いか、近頃の若い者が、無性に新らしい事物に趨つて古老の言を「も」も「なく」却ける悪い傾向を持つてゐるのに對して頂門の一針であらう。現に舊冬三陸一帶稀に

十五濱村から更に引返して飯野川町、柳津町等を迂廻して、志津川町の被害箇所を見、本吉郡大谷村の大谷を見る。此處で

見る鰯の大漁で、そのため此の地方一帯の沿岸の漁家は勿

等を眞面目に研究することになつたと新聞にも報道して

論農家に至るまで女、子供總動員

して獲れた鰯の處理方に備はれて

多忙を極め、延いては恰度事業實

施の最盛期だつた、農村振興土木

事業の就労希望者が一時絶無とな

り、そのため事業の進捗は尠から

ぬ支障を來したと岩手縣土木當局

から内務省へ公文報告があつた程

大漁があつた。その鰯の漁獲が、

時ならぬ季節であり、まして稀

有の豊漁であるため、土地の古老

は、何かの凶事の前兆ではないか

と、明治二十九年の津浪の前にも

魚類の大漁があつた事を思ひ比べ

て胸を痛めた由。捨て難い話で氣

象、地質方面的學者も、魚類の大漁と、地震との因果關係

に荒れ果て舟が山裾まで打ち上げられ、高みにあつた數

ある。

氣仙沼町は幸にも稍々海岸か

ら離れて町並があるために被害

も甚大とまでは行かないが、そ

れでも、同町の港灣工事のため

に同港に碇泊作業中だつた漁船

船は、津浪の際海が海底が見え

る程渦巻いたのに捲き込まれて

何遍となくグル／＼廻された上

沖へ浚つて行かれようとしたが

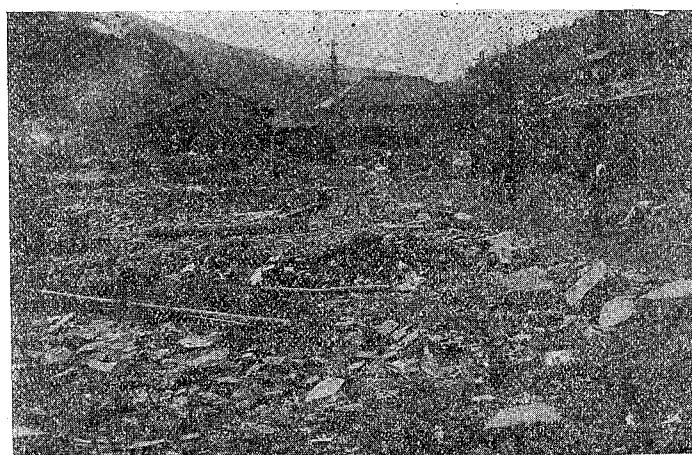
乗組員の必死の努力で辛うじて

流失と沈没とを免れた由。

氣仙沼から石割崎を超えて宮

城縣の最北端の海岸地である唐

桑村只越を見る。こゝも亦一樣



し壊倒て總は側左及前手) 屋家たつ殘の勝雄村濱五十 (6)  
くるふてつ殘が近附の此の際山に纏て

軒の家が僅に無事だつただけ、徒に殘る礎石の間に「何某ズウタク」と覺束なくお國なまり

で居宅の跡を表した、消し炭か、

木の燃えさしで書いたらしい立て

札を見ては更に哀愁を覚えしめる

唐桑村から岩手縣へ入る頃即ち

岩手縣氣仙郡氣仙町地内の宮城縣界近くでは丁度農村振興土木事業

で縣道の改良工事の最中で、切下

げ工事で一米以上も高く低く斷層

をなしてゐるので、縣界を境とし

て目下車馬の通行不能であつた。

此の箇所ばかりでなく他にも二三

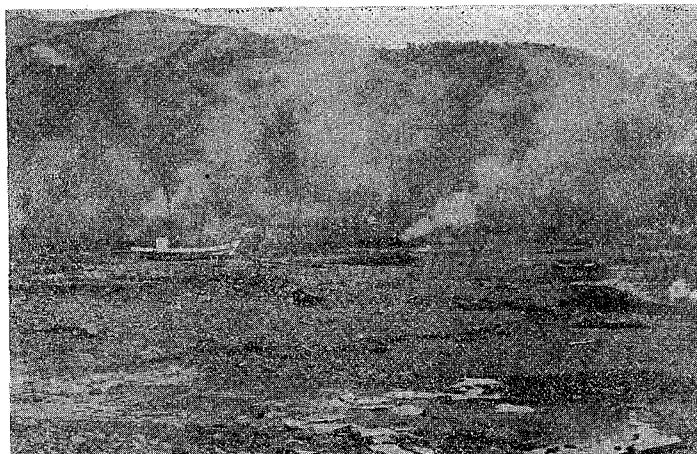
あつたが此の工事中なために、何

れ程救護や避難の邪魔をしたか知

れない。私は工事がもう少し早く

出来上つてゐればと思ふよりも、いつそ來る津浪なら何故

るが、たゞ、吉濱村役場に行つた時、其處の役場だけは至



燒き根屋草の屋家をし壊破は煙白) 跡慘の越只村桑唐 (7)

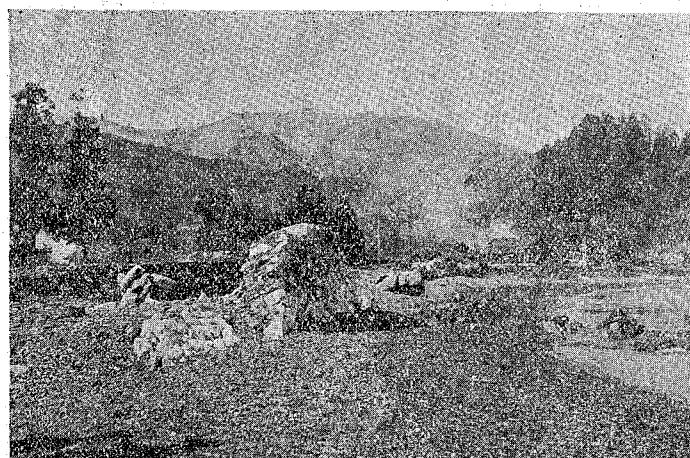
(のもるゐててすき

もう少し遅く來なかつたのだらうと天を怨めしく思つた。  
少くとも四月か五月になつたな  
らば、工事も完成した後だつたらうし、それに、遭難の人々を  
あの寒空で苦しませることも無かつたらうと思ふ。及ばぬ事とは知りながら此して慘害の跡を訪ねては思はず嘆息と愚痴とが  
出る。

私は岩手縣に入つても、高田、盛、越喜來、唐丹、釜石等海岸の諸町村を經て宮古まで訪ねたが、私の此の冗長な愚文を以てしては何處まで書いても果てしが無い、貴重な紙面を塞ぐことを恐れて個々の説明は之を避け

極キチンとして村長初め通常通り事務を執つてゐるので此ある。

の地方ではまことに珍らしく感じられた。それは、此の村でも若干の流失家屋や被害が無いでも無かつたが、それはホンの僅で、大部分は無事だつた爲である。吉濱村は海岸に沿うた部落であるのに、被害が、かくも尠少だつたのは、明治二十九年の津浪の時は他の地方と同様甚大な被害があつたが、復興の時に、再度の津浪を虞つて高地へ部落が移つたために今度の津浪の魔手を免れたのであるとのこと、それともう一つは前回の津浪の復舊工事として國庫補助を受けて築造した海岸堤防の堅牢だつたのが、惨害を薄めるのに非常に役に立つたためださうである。



作で積練と控の當相) 所箇潰決の防堤岸海澤大村桑唐 (8)

(るゐてれらやにし押一も垣石の此たれら

全國で有數の三陸漁場を眼前に控えてゐる人達には、その漁撈の手足である船に、船置場に最も近く居を構えたいのは自然の慾で、何回となく受ける津浪の笞の下にあつてさえ、まだ同じ場所に、船に近い所に復興の礎を築くべく既に營々と努力してゐる。また再び、三度び津浪が來るであらうと考えられる三陸に於て猶且海に近く居を構えたがる此の人達に、何うして再び賽の河原式の復興をするのかと尋ねて見たら、何十年に一度位の津浪を恐れて毎日の生計た。

「板子一枚下は地獄」の船乗り衆の勇氣がさうさせるのか手近に、便利にを望む人間の本性が、又繰り返すかも知れぬ惨害に對する危惧を無理に打ち消してさう言つてゐるのか、何ちらであるかは私にはまだ解り兼ねる。が、さうした氣持を持つ者が多數に居る事を前提として、今度の災害に對する復舊事業を畫策しなければならない事は絶対に必要なことである。

それからもう一つ切實に感じたことは、今少し此の地方の道路が完備してゐたならば、此うした不可避の災害の救援が、モツト早く徹底的に行はれたらうと言ふことである。私の見て廻つた所の中でも道路が、自動車の通行し得る限りに於ては、救護、慰問の手は津浪の即日から行き亘つてゐるが、さうでない所などは三日も四日の間塞空に着のみ着のまゝで空しく救援の手を待つの外無かつた所が隨所にある。平生海運に頼つてゐたものが、船と言ふ船は大小の差別なく總て津浪の贅になつてゐて役に立たない。こうなつては絶海の孤島と擇ぶ所が無い。辛うじて大

湊要港部から救援に派遣された軍艦によつて糧食衣類等を補給せられたが、これには相當の時日を要する。陸續きの地方からの救援が得られないで、船からの救援に待つの外ない等は悲惨である。當時此の地方の人人は何程か完備した道路の無い事を殘念に思つた事だらう。

縣の中心部たる陸羽街道、東北本線の通じてゐる地方から二十里、三十里と離れてゐる三陸の海岸線各地方には中心部と連絡する幹線道路も僅々二三線に過ぎず、海岸線を縫ふ道路さえも未だ一貫して車馬が自由に通行し得ない状態にある今日、此の惨害に遭遇して先づ何よりも道路の完備が刻下の急務であると叫ばずにはゐられない。

財政豊かでない東北地方の諸縣當局に今直に之が實現を望む事は固より無理であらうが、世の識者に、此の氣の毒な地方の人々を救ふため出来る限りの理解と援助とを望んで已まない。